

地域性の形成における 人口・環境要因の作用

1. 研究組織

研究代表者：宮嶋博史（東京大学東洋文化研究所・教授）

研究分担者：斯波義信（国際基督教大学教養学部・教授）

柳澤 悠（東京大学東洋文化研究所・教授）

斎藤 修（一橋大学経済研究所・教授）

上田 信（立教大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

今日の世界の人口分布を見ると、地域的な偏差が著しいが、アジアもその例外ではない。アジアを人口分布の面で大まかに分けると、東・南アジアの人口稠密地域と内陸・西アジアの人口希薄地域に大別することが可能であり、東南アジアは両者の中間に位置している。こうしたアジアの人口偏差は、すぐれて歴史的な産物であるとともに、自然環境と人間との交互作用の産物でもある。アジア各地域の地域性を問題とすると、各地域の人口分布を与えられた前提とするのではなく、それがどのような歴史過程の産物であり、人口の問題が各地域の地域性に如何なる影響を与えたのかを究明する必要がある。本研究班のメンバーはいずれも、東アジア・南アジアという人口稠密地域の歴史を専攻分野としているが、両地域の歴史発展において、人口の問題や自然環境の問題が占める重要性を意識しつつ、研究を進めて来た。

東アジアや南アジアの研究では、その稠密な人口の存在は前提されているものの、なぜ両地域が人口稠密地域になったのか、また人口の希薄な地域と比較した場合の両地域の歴史発展や社会構造の特徴はどこに求められるかについては十分な考察が行われてきたとは言い難い。

本研究班の目的は、東・南アジアにおける人口の歴史的変動を10～19世紀にかけて明らかにするとともに、両地域の稠密な人口分布がその地域性の形成にいかなる影響を与えてきたのかを究明することである。その際、ジャワを除いては、19世紀末まで人口希薄地帯であった東南アジアとの比較を意識することによって、東・南アジアと東南アジアの地域性の形成を比較検討するという方法をとることとした。

3. 平成7年度の研究経過

平成7年度においては各自の研究分担テーマについて、個別に研究を進めるとともに、B03班との共同の下に、「中国と東南アジア」研究会を開催して、東アジアと東南アジアの地域性の比較を追及した。この研究会には、本研究班から3名が報告を行ったが、各自の報告のテーマと概要は以下のとおりである。

斯波は、中国、特にその華南地域と東南アジアを結び付けるものとしての華僑に注目して、「華僑史の立場から」という報告を行った。斯波はまず12世紀にはじまる華僑の歴史を16・17世紀、19世紀を画期として3つの時期に分けるとともに、華僑の類型を華商型（トレーダータイプ）、華工型（レイバラータイプ）、華僑型（受国者タイプ）、華裔型（現世代タイプ）の4種類に分ける考え方を示した。そしてこれら4類型を時代的変遷の中で捉えるとともに、現在の東南アジア諸国での華僑のあり方の違いを概観した。さらに華僑について、これをネットワーク論で捉えようとする考え方に対して、斯波はその問題点を指摘した。すなわちネットワークという捉え方には、中国人独特の結束力とか団結力が前提されていると考えられるが、今日の華僑は華裔の世代であり、むしろトランスナショナルである。華僑ネットワークは煎じ詰めると地縁、血縁、同業という中国人性の問題になるが、東南アジア華僑の出身地である華南の地縁、血縁、同業意識は、華北のひじょうに固定的なものとは違って、もっとソフィスティケートされたものであることに注意する必要がある。従来の中国についての捉え方は、華北にピュアなものがあり、それが周辺地域に広まっていくというものであったが、今日では華南こそが中国の中心だとする考え方が強くなっている。東南アジアの華僑を論じる際にも、華南と東南アジアという枠で論じるべきで中国全体をひとまとめにするのは意味がない、以上が斯波の報告であった。

上田信は、「中国社会史の立場から ― 漢族社会における婚姻関係」と題して報告を行った。上田はすでに公刊された自身の著書、『伝統中国』（講談社、1995年）において示した3つの親族関係、すなわち日本＝名詞的關係、タイ＝動詞的關係、中国＝形容詞的關係について説明を加えるとともに、同書では扱われなかった女性および子供の問題から、中国人性の本質を明らかにしようとした。形容詞的親族関係を本質とする漢族では、祖先を共有することを認知したうえで、祖先からの世代の尊（たか）い、卑（ひく）いによって親族関係を秩序づける。これを輩分というが、輩分は、同一の宗族内だけでなく、婚姻によって結ばれる他の宗族との関係を秩序づけるものである。すなわち、二つの宗族が頻繁に婚姻を重ねる時、輩分の同じものどうしが結婚することによって、二つの宗族間で輩分の秩序が乱れないようにするのである。

こうした婚姻による異なる宗族の結びつきと、輩分による秩序立ては、漢族が新しい地域に移住して、初期の混沌とした状態から地域社会が形成されてくる時に、きわめて重要な役割を果たしたのである。

こうした輩分意識は漢族の場合、子供のころから植えつけられるものであって、したがって小学生以上になると子供は遊びのグループを形成しない。東南アジアに移住した漢人が、婚姻関係や子供の育て方の中で漢族としてのアイデンティティをどのように形成していくのか、あるいは放棄していくのか、二つの問題を考えることが、東南アジアと中国、中国人の問題を解くカギになるのではないかと、上田の報告は以上のようなものであった。

宮嶋博史は、「朝鮮史の立場から ― 親族関係から見た朝鮮・中国・タイ」と題して報告を行った。宮嶋の報告は、上田が提唱した親族関係の3類型のうち、タイの動詞的關係と中国の形容詞的關係の区別が不明確であることを出発点として、朝鮮から見れば、中国の親族関係はタイのそれにむしろ近く見えることを主張するものであった。宮嶋は、祖先を共有する父系血縁集団であるという点では共通の性格を有する、中国の宗族と朝鮮の同族の相違点を、3点にわたって指摘した。すなわち第1に、中国の宗族における籍貫は可変的であるのに対して、朝鮮の同族の本貫は不変であること、第2に、中国では異なる宗族集団がより高位のリニージを形成することがあるのに対して、朝鮮では同族の枝分かれという形でしかありえないこと、第3に、祖先祭祀のための族産の設定が、中国では有力者の自発的意志に委ねられているのに対し、朝鮮では相続財産からの控除という形で制度的に保障されていること、の3点である。そしてこうした両者の相違は、朝鮮の同族が中国の宗族に比べて組織としての永続性・強靱性を強くもっていることと関連するものであり、親族関係が融通無碍である点では中国はむしろタイに近いのではないかと、というのが報告の内容であった。

3名の報告について、B03班や他の班のメンバーも交えて個別討論と総合討論が行われたが、本研究班の研究課題と関わる議論としては、ネットワークというものの理解をめぐる議論が重要であった。東南アジア研究者からは、地縁・血縁・同業にもとづく中国人の結合は組織の構成員であることを前提としたものであり、ネットワークとは捉えられないとの疑義が提起された。これに対して上田は、組織を前提とした日本人の結合のあり方や、ネットワークにもとづく東南アジアの人間関係との違いを捉える概念として、中国人の人間関係を回路（チャンネル）という概念で捉えられないかと答え、中国史研究者の濱下武志は、中国人は各人が股（かぶ）をもっていて、その股が状況によって宗族や同郷・同業集団に投資されることにより人間関係が形成されると考えることができるとの意見が出された。また宮嶋は、宗族をはじめとする中

国人の組織はきわめて不安定なものがあり、はたして中国人の結合が組織を前提としたものと見てよいのかとの意見が出された。

4. 今後の課題

平成7年度においては、東南アジアと中国の比較をめぐって、上記のような検討が進められたが、その中で、1) 中国と東南アジアを比較するその基準そのものが、ネットワーク論に見られるようになお曖昧であること、2) 東アジアの地域性というものを考える際に、東アジアを一括してくれるものは何なのかをさらに検討する必要があること、3) 東アジアと同じ人口稠密地域である南アジアまで視野に入れた時、東アジア・東南アジア・南アジアの地域性を比較するにはどのような視角が必要なのか、等の課題がなお未解明である。平成8年度においては、これらの課題を追求することが、本研究班の目標となろう。